

研究の Forefront of research 最前線

1人でも多くの患者に光を 眼科医療の未来を切り拓く

おくむら なおき
生命医科学部 奥村 直毅 教授

2001年、京都府立医科大学卒業。眼科医として診療、手術を行いながら、角膜の研究に従事。
2020年より同志社大学生命医科学部教授。角膜内皮障害の新しい治療法の研究と開発を
行い、2018年には同志社大学発のスタートアップ「アクチュアライズ」を起業。



角膜移植に代わる治療

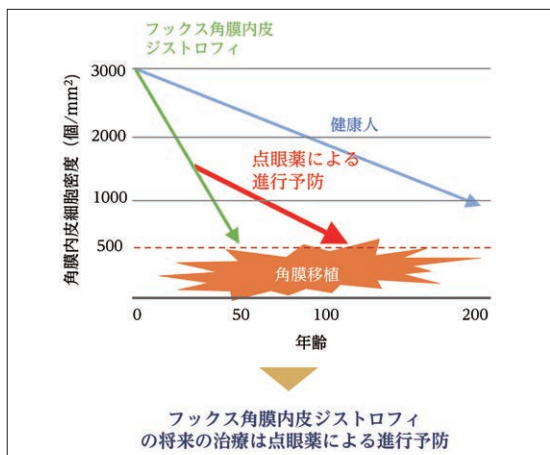
移植でしか視力を回復できなかった眼の病気が、10分程度の手術や点眼薬で治療できるとしたらー。生命医科学部の奥村直毅教授、小泉範子教授を中心に進められてきた、角膜内皮疾患の新規治療法の開発。研究が、眼科治療の未来を変えるかもしれない大きな成果を挙げている。

角膜とは、眼球の一番前にある透明な組織で、この透明を保つために欠かせないのが角膜内皮である。「角膜内皮が病気になることで傷んでしまうと、角膜は白く濁り、視力が低下してしまいます。このような状態に対する今の治療法は角膜移植のみなのです」と奥村教授は言う。ところが、世界的にドナー角膜が不足しており、世界では70人に1人しか移植を受けることができないのが現状だ。

この厳しい現状を変えるべく、奥村教授らは同志社大学で再生医療と点眼薬の研究を重ねてきた。その中で、提供されたドナー角膜から角膜内皮細胞を大量に培養して増やすことに成功。さらに、培養した細胞をROCK阻害剤という薬剤とともに眼に注射することで、角膜内皮を再生できることを、動物を使った研究で発見した。

また、奥村教授らは、世界の角膜移植の40%を占める疾患であるフックス角膜内皮ジストロフィの治療として点眼薬の開発も行っている。角膜移植を受けた患者の角膜内皮から、病気の性質を持ったモデルとなる細胞を培養して、そこから数多くの薬の効果を調べ、シロリムスという薬が治療薬の候補であることも発見した。

奥村教授らは「これらの成果を製品化することで、失明など重い視力障害で困っている患者さんを救いたい」との思い



シロリムスという薬剤がフックス角膜内皮ジストロフィに有効である可能性があるという大学での発見をもとに、現在アクチュアライズ株式会社と参天製薬が共同で米国で治験を行っている。

から、2018年に同志社大学発のスタートアップ「アクチュアライズ」を起業。大学の研究室と共同で研究・開発を行っている。実際にシロリムス点眼薬は、米国で治験を進めており安全性と有効性が証明されたら世界初となるフックス角膜内皮ジストロフィの治療薬が世に出ることとなる。

研究からビジネスの世界へ

「大学での研究成果を大企業に引き継ぎ、実用化してもらうことも一つの方法かもしれませんが、大学の研究者が起業する大学発スタートアップにより実用化を目指すことは世界的に非常に一般的です。自分達の手で開発をスピーディーに進め、より確実に患者さんに届けるためには起業が近道だと判断しました」と奥村教授は起業の理由を語る。

しかし、奥村教授にとって初めて対峙するビジネスの世界

は困難の連続だった。「経営、法務、知財、臨床開発など様々な専門家が必要です。さらにベンチャーキャピタルから出資を得るためにビジネスのルールに則った説明が必要となります。なにせ初めてのことで、すべてが手探り。専門家が分業をして進めてくれますが、私自身も研究だけでなく、それぞれの分野を理解してコミュニケーションを取る必要があります。今も日々勉強です」と苦労を語る。

私大の雄々として世界で戦える

スタートアップという同志社大学としては新しい取り組みではあったが、職員や教員のサポートがありがたかつたと奥村教授はふりかえる。「前例が無いことが多かったが、困っていることは、都度、大学に相談して解消し、柔軟に対応していただきました。同志社の温かさや良い部分を最大限に活かしたスタートアップ支援でした」

学生にとっても、大学発スタートアップの存在は大きいと奥村教授は言う。「大学は社会に出た時に、お金を稼ぐ術を学ぶところでもあります。学位のための研究に留まらず、社会を良いものにするための研究を行って、実際に製品として社会に送り出すということに関われることはまたとないチャンスのはずです。どんどん行こうと学生に話しています。私立大学の雄々として、十分に世界で戦えると確信しています」

学生に輝いてもらいたい

創業から5年。再生医療等製品は日本と中国での治験を準備中、点眼薬は国内の参天製薬と共同でアメリカにおいて既に治験がスタートしている。とはいえ、医薬品開発の成功

率は一般的に非常に低く厳しいもの。多くのスタートアップがそうであるように、アクチュアライズも生き残りをかけた戦いの真っ只中にある。

「スタートアップはリスクも高いですが、社会を前進させる不可欠な存在です。国も過去最大規模の予算を費やしてスタートアップ支援を始めています。スタートアップは怪しいという時代錯誤な認識ではなく、社会の発展の原動力だという当たり前の認識を学生の皆さんには持つてもらいたいです。大学を卒業して大企業に就職することも選択の一つですし、スタートアップにチャレンジしてみることも全く合理的な選択肢だと思います。大企業に就職したから一生安泰というわけは無く、大企業への就職であろうが自らの起業であろうが、学生には人から笑われるくらい大きな夢を持って突き進んでほしいと思います」





DOSHISHA DNA

【ビジネスパーソン】

自信はやがて確信に 次代を担うDXリーダー

楽天での6年間の会社員生活を経て2011年に「株式会社プレイド」を創業した倉橋 健太さん。2015年に顧客データを解析するソフト「KARTE(カルテ)」をリリース、2020年に上場した。

株式会社プレイド (PLAID, Inc.)
代表取締役 CEO

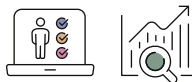
くらはし けんた
倉橋 健太さん

2001年、同志社香里高校卒業。2005年に同志社大学法学部卒業後、楽天株式会社に入社し、楽天市場のマーケティングなどに携わった。2011年に「プレイド」を創業。

顧客をリアルに把握できる 「KARTE」

「例えば店頭で服を買うとします。その時、店員はお客様を見て、どんな背格好か、どんな服を着ているのか、夫婦で来たのか、子供連れなのかなど、さまざまな情報が目に入ってきます。そして会話をすると、どんな物を欲しいと思っているのかなどを知ることができ、そのお客様が望みそうな商品を提案できます。それはリアルな世界では当然のように起きていることです。今、皆さんは、インターネット上の買い物はもちろん、旅行の予約や音楽のサブスクなどが日常となっています。『KARTE』はインターネット上の人の行動をリアルタイムデータから解析して、個々のユーザーの体験向上を実現するソフトウェアです。以前は、インターネットに出店した企業が分かるのは、何人かその商品を見たのか、何個売れたのか、といった程度の情報しかありませんでした。しかし、『KARTE』を利用するとリアルな買い物の場と同じようにユーザーを理解することができるよう。そして、その人に合った商品等の情報をパーソナライズして提供することで、売上や顧客満足度を上げることができます。ユーザーにとっても、自分の好みやニーズを理解した商品が提案されるのは、とても便利なことです」

膨大なユーザーデータを解析して顧客体験向上を可能にする「KARTE」は、今では人材、不動産、金融など幅広い業種で導入が進み、サービス開始から7年で延べ145億ものユーザーを解析。プレイドは、国内有数のSaaS(インターネットを通じて利用出来るソフト)企業として成長を続けている。



出会いが大きな力に

そんなブレイドだが、倉橋さんが起業してから「KARTE」をリリースするまですべてが順調だったわけではない。「初めは六本木ヒルズのライブラリーから、たった1人でスタートしました。初心忘るべからず、ではありませぬが、今でも気分を変えたいときや、ちょっと考え事をするときに、そのライブラリーを利用しています」。起業当初は、スマホ向けのアプリを作ったり、webサイトのコンサルタントをしたりしていたという。

「KARTE」開発のきっかけは、エンジニアの柴山直樹さんと2012年に出会ったことだった。柴山さんは、東京大学大学院で、人間の脳などに関連する神経科学や機械学習の研究をしていたが、休学してITベンチャーで働いていた。「楽天時代の同期から柴山さんを紹介され、すぐに意気投合しました。例えば、節目節目でいろんな人との出会いが大きな力になりました」。柴山さんはそれまで勤めていた会社



を辞めて倉橋さんと合流。何度もファミレスで議論していくうちに、「KARTE」の輪郭が見えてきた。

だが、構想ができてから、実際にそれを開発し、リリースするまでには約2年間の準備期間を要した。「これはネット通販のような小売だけの問題ではない、と初めから考えていました。ユーザーのことを理解して、なにがしかの働きかけをするには、どんな企業にとっても必要で確実に来る未来だ」という確信がありました。だから、時間をかけてきちんとしたものを開発しなければいけないと。アイデアだけの状態で投資家に営業して回り、2014年に1億5000万円の資金調達することができて、ようやく開発に取りかかり始めたという。

自分が成長できるかどうか

そんな倉橋さんは、1995年に同志社香里中学校に入学した。「大学卒業まで10年間、同志社で過ごしました。小、中、

高とサッカーをやっていた、大学時代の思い出も、サッカーですね」。大学公認のサッカーサークルリーグには属していたものの、ほとんど機能していなかったチームを引き受けた。「試合には助っ人を集めてなんとか参加していましたが、それ以外では3、4人しか集まらなくてまともな練習もできなかった。そんなチームでしたが、卒業するときには100人ほどのメンバーに。サークルの仲間を増やしていくうちにいろんな人と交流できて、世界が広がりました。1人では何もできませんが、2、3人と集まるとそれぞれの個性が集まってチーム力になり、いろんな魅力が生まれてくる。その過程はとても面白いものでした。今思えば、それは起業することと似ていますね」と笑う。

2005年に楽天に入社した。「漠然と、将来は起業したいと思っていたのですが、どうしたら良いのか何と分からない状態でした。当時スタートアップとして急成長していた楽天に入れば、何らかの経験を得られると思ったんです。三木谷浩史社長とも直接会う機会もあつて、そうした思いを伝えると『(起業の)踏み台としてやってみなさい。良いステップになると思う』と言っていたんです」

6年間の勤務を経て2011年秋に退社し、ブレイドを創業した。「そのまま組織に属していくことと起業すること、どちらの方が自分の成長につながるかを考えたとき、圧倒的に起業する方だと思いました。たとえ失敗しても死ぬことはないだろうし、何とでもなる、という根拠無き自信がありました」。自信はやがて確信となり、「KARTE」にかけた思いが現実のものとなった。

最後に、起業を考えている学生へのアドバイスを聞いてみた。「起業はリスクを伴います。新しいアイデアで市場を開拓するスタートアップ企業は、急速に拡大できる可能性がある反面、成功する確率は非常に低い。軌道に乗るまでには想像できないようなタフなシーンがたくさんあります。でも本気でやりたい人ならきつと乗り越えられます。私も、そうした覚悟のある人は応援していきたいと思っています」

DOSHISHA NEWS

2023年度新設 全学共通教養教育科目 アントレプレナーシップ論

「てきとうふき 倜儻不羈」とは、同志社の創立者・新島襄が教育の理念とした言葉で、「常軌で律しがたいほどの独立心と才気に富んだもの」を示します。2023年度新設科目のアントレプレナーシップ論では、東京と米国シリコンバレーに拠点を置くベンチャーキャピタルDNX Venturesから様々な分野に専門性を持つ複数名のベンチャーキャピタリストを講師陣にむかえ、上場を果たす等の目覚ましい活躍をしている著名な起業家を招聘し、起業の意義やプロセスを学び、「倜儻不羈」を体現する起業家を生み出す素地をつくることを目指します。

日本の大学生の起業意識は世界に比べて高いとは言えません。混乱する世界のなかで、伝統的な日本企業に入社して働くだけでなく、革新的な企業を設立して社会に貢献する道もあり、大学生の時に起業という選択肢を理解しておくことは、その後のビジネスパーソンとしての選択肢を広げ、また、資本制社会のなかで企業はどのように設立され、どのように運営されているのかという知識を得るだけでも、企業で働く上で有益です。本科目では、起業家の生き様や彼らが挑戦するスタートアップの世界について様々な角度から紹介し、座学だけではなく双方向で授業を進めることで、思考力や判断力を磨き、学生が主体性を持つことを目標とします。「起業なんて無理」「自分には向かない」と思う学生にこそ受講して欲しい科目です。

講師紹介

message

同志社から世界へ。

本科目は、倜儻不羈を体現する起業家を育成する目的でDNX Venturesの寄付講座として新設されました。日本を代表する現役の起業家、経営者とのやりとりを通じて、学生の皆さんには起業の意義やプロセスを学ぶと共に、将来の仕事について思いを巡らせて頂ければと思います。



くらばやし あきら
DNX Ventures代表 倉林 陽さん

本学商学部を卒業後、ペンシルベニア大学ウォートンスクール経営大学院を修了された後、本学総合政策科学研究科で博士号を取得。倉林氏およびDNX Venturesの人的ネットワークを活かして、上場を果たす等の目覚ましい活躍をしている著名な起業家を招聘する。



DNX Venturesは、米国シリコンバレーと東京に拠点を置くベンチャーキャピタルで、これまでに累計約1,000億円のファンドを運用し、日米を中心に100社以上のスタートアップ企業へ投資を実行してきた実績を持つ。



全学共通教養教育センター
公式YouTubeチャンネルで
科目紹介動画を公開中。





2024年度、新しい学びへ

Our New Learning-Lifestyle

同志社大学では、2024年度から、オンライン授業を効果的に取り入れた、13週の教室での授業と2週分のオンデマンド授業を基本とする新たな学年暦を導入します。学期始めの1週間は、履修科目登録を行うオリエンテーション期間と初回のオンデマンド授業が並行する期間となり、この1週間を「**Doshisha Opening Week(DO Week)**」と呼び、新しい学びがスタートします。

2週分をオンデマンド授業とすることにより、夏期休暇期間やいわゆる春休み期間が長くなり、フィールドワーク、各種実習、インターンシップ、ボランティア活動等の新たな主体的な学びの機会が生まれます。また、海外留学プログラムや留学生プログラムへも参加しやすくなるほか、課外活動等に取り組む時間も長く確保できるようになります。この新たな学年暦により、学生のみなさん一人ひとりのニーズにあわせた新しい学びのかたちを実現することが可能となります。



2週分のオンデマンド授業は、イントロダクション(1週分)と、授業の総括や期末試験・レポート試験の解説・講評等(1週分)が基本となります。初回授業であるイントロダクションは、各学期始めのオリエンテーション期間中の「**DO Week**」に受講します。

イントロダクションには、シラバスの解説が含まれます。オリエンテーション期間中に、履修科目登録に先立ち初回授業をオンデマンド受講することで、授業の内容を確認することができ、登録科目のミスマッチを回避して、履修中止科目を減らすことにもつながります。

13週の教室での授業期間終了後に配信されるもう1週分のオンデマンド授業では、授業の総括や期末試験の解説・講評等が行われます。これにより、授業内容の理解が深まり、知識の定着が期待できます。

なお、科目の性質により一部の科目では、オンデマンド授業を2~14週目の教室での授業期間中に実施したり、オンデマンド授業を行わず、全て教室等で授業を実施したりすることもあります。また、全てオンデマンド授業で実施する科目もあります。

2023 April

13+2の新たな学年暦の導入
DO Weekから始まる
— あなただけの新しい学びのかたちのために —

「2024年度、新しい学びへ」
特集サイト



https://www.doshisha.ac.jp/students/curriculum/new_calender.html



2023 April

2023年度予算編成方針について

2023年度予算編成方針は、法人の予算編成方針に基づき、2022年10月6日の大学予算委員会および大学評議会での審議のうえ決定されました。

この方針に基づき予算編成を行い、一層の教育研究環境の維持・充実を進めてまいります。なお、予算の詳細については次号に掲載予定です。

新型コロナウイルス感染拡大を契機とした遠隔教育の普及・進展を含め、オンライン環境を活用した教育研究の急速な拡大は、大学の質保証システムのあり方に変革を迫る要素の一つとなった。大学設置基準改正を含む質保証システムの改善・充実においては、学修者本位の観点から各

大学が先導性・先進性に満ちた教育研究活動を行っていくことが期待されている。本学は、創立者の意志を受け継ぎ良心教育の実践に邁進することこそが、いつの時代にも通用する大学の質保証に繋がるとの信念の下、個の尊重、他者への共感、多様性への理解を大切にする姿勢を持ち、社会で活躍する人物を世に送り出し続けなければならない。

学校法人同志社が採用する「日本私立大学連盟 私立大学ガバナンス・コード」に基づく法人運営を進める上で重要となる学校法人同志社の中期的な事業計画の主軸は、「同志社大学ビジョン2025ー躍動する同志社大学ー」（以下「ビジョン」という。）及びその中期行動計画である。2025年を目前に控える中、これまでの成果や進捗状況を踏まえつつ、ビジョン、中期行動計画に

基づく年度ごとの重点的に取り組む課題の遂行のため、同志社創立150周年記念事業（大学事業（以下「記念事業」という。）への取り組みを含めて本年度の予算編成を進める必要がある。

教学面では、2024年度から導入する新たな学年暦に基づく授業運営が円滑に実施できるよう、ICT環境の充実等、多様な面で入念に準備する。国際連携推進では、記念事業「国際主義」の深化に向けた「人を植ゆる」の事業を展開する。さらに、数理・データサイエンス・AI教育プログラムやカーボンリサイクル教育研究プラットフォーム事業、次世代を担う優れた若手研究者の養成といった、緒に就いた教育研究事業を積極的に進めなければならない。

教育研究環境の面では、恒常的に実施している教室のマルチメディア環境整備について、ネット配信授業への対応を意識の上、重点的に進める。また、新写真館及び新寧静館の供用を開始し、新図書館改築工事では工事期間中の図書館機能維持を図る。さらに、京田辺キャンパスリニューアル建設事業及びスポーツコンプレックス建設事業を進める。学生支援の面では、コロナ禍の影響

や社会情勢による経済の不安定化を踏まえての奨学事業の着実な実施に加え、学生相談体制の改善・充実を図り、「学び」の充実をサポートする。大学運営の面では、ICTの活用による事務の効率化を進めると共に、「個が輝く」ダイバーシティキャンパスの具現化やSDGsに貢献する取り組みの可視化に努め、Webサイトリニューアルでは、これらの取り組み等に係る発信機能を強化する。さらに、中長期的な本学の発展を見据え、教育研究環境整備のための第2号基本金及び奨学事業充実のための第3号基本金の組入れを計画的に進める。

収入面では、学生生徒等納付金について、学部では本年度を含む過去4年間の推移も見ながら、入学定員通りの入学者数を見込み、安定的な財源を確保する。また、入学志願者の安定的確保や補助金、寄付金、受託事業収入など外部資金の増収について、引き続き積極的に取り組んでいく。

支出面では、人件費は新規採用を含む所要額を計上するが、業務の点検、見直し等を行い、人材派遣や業務委託に係る経費も含めた、

いわゆる総人件費は原則として前年度予算の範囲内とする。また、物件費については、重点事業項目を含め、全体として抑制を図る。さらに、教育研究費については、教育環境改善費予算及び国際化戦略特別経費予算は前年度と同様の基準により計上するほか、繰越予算については具体的な事業実施計画に基づく効果的な執行を推進する。

なお、レジョンに係る中期行動計画で目標に掲げている、収支均衡予算編成及び経常勘定における繰越支出超過額の解消を実現する上では、学費支弁者の負担だけでなく、既存事業の見直し等を通じての支出抑制により、教育研究環境の維持・充実に取り組むための財源を確保する必要がある。については、節減が困難な経済情勢が想定されるが、経常的経費に係る支出抑制策を継続するとともに、過年度の予算執行状況を精査し、予算の効率性の活用を検証の上、予算を編成する。また、大規模建設事業については、中長期的な施設設備整備計画に基づき、その他既存の施設設備の整備については、安全管理面において緊急性の高い事業を最優先としつつ、キャンパスの快適性にも配慮の上事業を厳選し予算を計上する。

以上の方針のもと、予算における計画性を重視し、安定的な収入確保のための定員通りの入学者数確保と限られた財源を効率的に配分することを大原則として2023年度予算を編成する。



2023年4月 同志社大学新島塾 第5期開塾

文理の垣根を越えたリーダー養成教育プログラム

同志社大学では、良心教育を継承しながら、文系と理系の垣根を越え、総合知を備えた次の時代を担う人物を養成するための新しい教育プログラム「同志社大学新島塾」(以下「新島塾」)を2019年度に開塾いたしました。新島塾では、学生の皆さんの意欲と能力を在学中に可能な限り伸ばし、それぞれの学問分野の専門性を身につけるだけにとどまらず、リーダーシップとフロアシップを兼ね備えた人物の養成を目指しています。

いかに時代が移り変わろうとも、人に寄り添って真摯に意見を汲み取り、全体を見渡して、他者や組織を最善の方向に導くことができる人物は、多様性と寛容に満ちた豊かな社会を築く上で欠かせない存在です。

新島が「人を植ゆる」という言葉に託したものの、「一人一人大切ナリ」という言葉に込めたものが、新島塾にはあると信じています。

塾生の皆さんが互いの「良心」を信頼し合い、真剣で自由な、そして人格的な知的交流を重ねることで、互いに切磋琢磨できるものと大いに期待しています。

同志社大学新島塾 塾長
(同志社大学 学長) 植木 朝子

入塾対象等

対象者	本学学部2年次生(出願・審査時は学部1年次生)
入塾期間	学部2年次から始まる通算1.5年間
定員	20名(1学年につき)
修了証	塾長(学長)から「新島塾修了証」を授与します

特徴

POINT 1	新島塾独自のプログラムが受講できます!
POINT 2	潜在力の顕在化に向けた基礎トレーニングです!
POINT 3	リーダーシップ発揮のための実践の場があります!

新島塾オリジナルサイト
(学びのかたちの新展開)



同志社大学新島塾
<https://next.doshisha.ac.jp/index.html>

Instagram 始めました
@neesimajyuk_official



「同志社大学 2025 ALL DOSHISHA 募金」では、創立150周年に向けた中長期ビジョンの推進の他、経常的な取り組みである学生への奨学金給付や課外活動支援、施設設備整備に関する募集を行っています。

学生が充実した生活を送れるように、そして学びを諦めることのないように、皆様からのご理解と温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。

寄付の対象として指定可能なメニュー

VISION 2025の推進

- ①リーダー養成プログラムの運営支援
- ②グローバル化の促進支援
- ③高大接続プログラムの展開支援

奨学金給付

- ④特定寄付奨学金
- ⑤育英型奨学金

課外活動支援 ※大学の公認団体のみ

- ⑥体育会・スポーツ系公認団体活動の充実資金
- ⑦文科系公認団体活動の充実資金

施設設備整備

- ⑧今出川校地新図書館
- ⑨スポーツコンプレックス (京田辺)

募集要項

- 募集期間: 2017年10月1日~2026年3月31日
- 目標額: 50億円
- 寄付受入実績: 14億7232万円(2023年2月末現在)

意欲ある学生が、人に寄り添いながら他者や組織を導くことのできる次代を担うリーダーとなるべく、互いに切磋琢磨する教育プログラムを推進しています。

「特定寄付奨学金」を指定したご支援は、毎年その全額を原資として、コロナ禍の影響等で経済的に困窮した学生に対し、奨学金として給付しています。(2022年度の奨学金採用実績183名に約6000万円)

体育会・スポーツ団体や文科系団体を指定して、学生の活動を支援することが可能です。

学生の主体的な学びを支える場として、健康維持と向上に寄与する場として、建設事業を進めています。

ALL DOSHISHA 募金サイト
からお申込みをお願いします。

右記コードまたは

ALL DOSHISHA 募金 で 検索



- ※クレジットカード・銀行振込等の方法でお申込みいただけます
- ※寄付者銘板への掲示やオリジナルグッズの贈呈等、各種顕彰をご準備しています
- ※確定申告を行うことで約40%~50%の寄付金控除を受けることができます

お問い合わせ先

同志社大学 学長室 募金課 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
TEL:075-251-3230 FAX:075-251-3097 Email:ji-bokin@mail.doshisha.ac.jp



2023 April

新任教員紹介

この春に、新しく赴任された先生方を紹介します。
数字はそれぞれ①所属 ②職名 ③主な担当科目を示しています。



笹尾 佳代

(ササオ カヨ)
①文学部
②准教授
③日本文学講読(近現代A)



三宅 宏幸

(ミヤケ ヒロユキ)
①文学部
②准教授
③日本文学講読(広域A)



山辺 省太

(ヤマベ ショウタ)
①文学部
②教授
③Writing B I



小野 直子

(オノ ナオコ)
①文学部
②教授
③アメリカ大西洋史(1)



梶 悠輝

(カジ ユウキ)
①法学部
②助教
③刑事手続法概論



廣田 浩

(ヒロタ ヒロシ)
①法学部
②教授
③リーガル・フィールドワーク



胡 鴻洋

(コ コウヨウ)
①文学部
②助手



円淨 ゆり

(エンジョウ ユリ)
①文学部
②助教
③Reading A I



岩澤 政宗

(イワサワ マサムネ)
①経済学部
②准教授
③計量経済学I



原田 禎夫

(ハラタ サダオ)
①経済学部
②准教授
③公共経済I



田中 謙太

(タナカ ケンタ)
①法学部
②助教
③リーガル・リサーチ



大崎 祐馬

(オオサキ ユウマ)
①法学部
②助教
③政治学入門



小暮 憲吾

(コグレ ケンゴ)
①経済学部
②助教
③基礎演習



堀田 悠生

(ホッタ ユウキ)
①経済学部
②助教
③基礎演習



法雲 俊栄

(ノリクモ シュンエイ)
①経済学部
②准教授
③データ処理基礎論



古賀 康士

(コガ ヤスシ)
①経済学部
②准教授
③日本経済史I



伊川 萌黄

(イガワ モエギ)
①政策学部
②助教
③アカデミック・スキルI



中島 恵理

(ナカジマ エリ)
①政策学部
②教授
③ソーシャル・イノベーションの理論と技法



肖 淼

(ショウ ミョウ)
①商学部
②助教
③ビジネス・トピックス



石田 大典

(イシダ タイスケ)
①商学部
②准教授
③マーケティング論



木村 達明

(キムラ タツアキ)
①理工学部
②准教授
③システム情報学I



鈴木 将之

(スズキ マサユキ)
①理工学部
②教授
③電気磁気学II



石田 尚之

(イシダ ナオユキ)
①理工学部
②教授
③物理化学I



山縣 芽生

(ヤマガタ メイ)
①文化情報学部
②助教
③定量的データ分析



白浜 公章

(シラハマ キミアキ)
①理工学部
②准教授
③ソフトウェア工学



堺 健司

(サカイ ケンジ)
①理工学部
②准教授
③電気電子材料



野口 尚史

(ノグチ タカシ)
①理工学部
②准教授
③流れ学II・同演習



三木 啓司

(ミキ ヒロシ)
①理工学部
②准教授
③計算代数I



彌田 智一

(イヨダ トモカズ)
①理工学部
②特別客員教授
③化学システム工学実験I



田中 智之

(タナカ トモユキ)
①理工学部
②助教
③ベクトル幾何



稲垣 和寛

(イナガキ カズヒロ)
①理工学部
②助教
③力学II



田原 義朗

(タハラ ヨシロウ)
①理工学部
②准教授
③化学工学II



朴 鍾厚
(パク ジョンフ)

- ①グローバル
地域文化学部
- ②准教授
- ③コリア語インテシヴ



Matthew LARKING
(マシュー ラーキング)

- ①グローバル
地域文化学部
- ②准教授
- ③Global and Regional
Cultural Studies Seminar 1



高橋 克毅
(タカハシ カツキ)

- ①スポーツ
健康科学部
- ②助手



岩田 昌太郎
(イワタ ショウタロウ)

- ①スポーツ
健康科学部
- ②准教授
- ③スポーツ教育学



HAASBROEK Kyle
(ハースブルック カイル)

- ①生命医科学部
- ②助手



坂巻 綾望
(サカマキ アヤミ)

- ①司法研究科
- ②教授
- ③租税法I



松井 鉄平
(マツイ テッペイ)

- ①脳科学研究科
- ②教授
- ③神経生物物理学



川鍋 健
(カワナベ タケシ)

- ①アメリカ研究所
- ②助教



DIALLO Asmao
(ジアロ アスマオ)

- ①グローバル・
スタディーズ研究科
- ②助手



周 俊
(シュウ シュン)

- ①グローバル・
スタディーズ研究科
- ②助教
- ③特別研究B1
—現代中国政治研究—



木村 千夏
(キムラ チカ)

- ①学習支援・
教育開発センター
- ②准教授



鈴木 祐太
(スズキ ユウタ)

- ①ハリス理化学研究所
- ②助教



崔 裕眞
(チェ ユージン)

- ①ビジネス研究科
- ②教授
- ③京都の伝統産業と
ビジネス



村中 孝史
(ムラナカ タカシ)

- ①司法研究科
- ②特別客員教授
- ③労働法I



洲崎 博史
(スザキ ヒロシ)

- ①司法研究科
- ②教授
- ③商法演習I



石川 正道
(イシカワ マサミチ)

- ①高等研究教育院
- ②特別客員教授
- ③フューチャー
デザイン演習



蘇武 佑里子
(ソブ ユリコ)

- ①研究開発推進機構
- ②特定任用研究員(助教)



林 健二
(ハヤシ ケンジ)

- ①研究開発推進機構
- ②特定任用研究員(准教授)



柳澤 彰紀
(ヤナギサワ アキノリ)

- ①免許資格課程センター
- ②教授
- ③特別活動と総合的な
学習の時間の指導法

■総合政策科学研究科
朱 浩良助手

■政策学部
服部 篤子教授
小林 豊助教
西山 深助教

■政策学部
服部 篤子教授

■商学部
内野 雅之准教授
的場 竜助教

■経済学部
伊多波 良雄教授
上田 曜子教授

■経済学部
伊多波 良雄教授

■法学部
小倉 隆教授
太田 裕之教授
佐竹 壮一郎助教
保井 健児助教

■社会学研究科
楊 慧敏助手

■文学研究科
山田 和人教授

■文学部
田中 励儀教授

■文学部
山田 和人教授

■文学部
田中 励儀教授

■文学部
山田 和人教授

■文学部
田中 励儀教授

■文学部
山田 和人教授

■文学部
田中 励儀教授

■文学部
山田 和人教授

■文学部
田中 励儀教授

■文学部
山田 和人教授

■文化情報学部
岩本 真裕子准教授
土田 潤助教

■理工学部
片桐 滋教授
下原 勝憲教授
渡邊 芳英教授
山口 博司教授
吉門 進三教授
榎原 絵里奈助教
新庄 雅斗助教

■理工学部
片桐 滋教授

■理工学部
下原 勝憲教授

■理工学部
渡邊 芳英教授

■理工学部
山口 博司教授

■理工学部
吉門 進三教授

■理工学部
榎原 絵里奈助教

■理工学部
新庄 雅斗助教

■理工学部
片桐 滋教授

■理工学部
下原 勝憲教授

■理工学部
渡邊 芳英教授

■理工学部
山口 博司教授

■理工学部
吉門 進三教授

■理工学部
榎原 絵里奈助教

■理工学部
新庄 雅斗助教

■理工学部
片桐 滋教授

■理工学部
下原 勝憲教授

■理工学部
渡邊 芳英教授

■グローバル・
スタディーズ研究科
Seifudein ADEM教授
ROLA Armand
Christopher
Cassidy助手

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

■グローバル・
スタディーズ研究科

退職教員

2023年3月31日付で、
次の先生方が退職されました。

■脳科学研究科
櫻井 芳雄教授

■司法研究科
山下 友信教授

■ビジネス研究科
浜 矩子教授

■免許資格課程センター
成生 達彦特別客員教授

■免許資格課程センター
沖田 悟傳教授

■学習支援教育開発センター
矢内 真理子助教

■研究開発推進機構
八木 雅之教授

■研究開発推進機構
廣川 純也准教授

■研究開発推進機構
眞部 寛之准教授

■研究開発推進機構
辻岡 綾助教

■研究開発推進機構
肥田 乃梨子学術研究員

■研究開発推進機構
北野 敬祐助教

■研究開発推進機構
岸田 広平助教

■研究開発推進機構
藤井 香里助教

■研究開発推進機構
阪口 幸駿助教

■研究開発推進機構
岡本 直美助手

■研究開発推進機構
大槻 晃右助手



2023 April

「ゼミで学ぶ 魅力を語る」

幅広い領域の専攻から数多くのゼミがある本学。

それぞれ、どんなことを学んでいるのか。

ゼミ教員が、個性豊かなゼミの魅力を語ります。

失敗を恐れず楽しい挑戦を

私の研究室では計算機を用いた課題解決全般を扱います。私自身が専門とするのは離散最適化アルゴリズムですが、昨今のAI・機械学習ブームを考えるとやや地味に見えますので、卒業研究で選べるテーマは「アルゴリズム」のほか「機械学習」「情報システム」としています。

3年次の「ジョイント・リサーチ」では、複数のゼミが共同で1つのクラスを構成し、PBL型グループワークを通じて問題の発見と解決のスキルを磨きます。現在は2つのクラスに参加しています。1つはビッグデータの実践的データ分析をおこなうクラスであり、もう1つは日本の古典籍画像データを対象として文字列や画像を分析するクラスです。技術だけでなくデータの背景に存在する文化現象の理解も重要です。いずれのクラスでもICTを活用する能力だけでなく口頭発表を通じて表現力や論理的思考力を養うことができます。

4年次の「卒業研究」では、各自のテーマに沿って自主的に研究を進めてもらいます。週1〜2回のゼミは、進捗報告と議論の場です。最近には特に、通常の進捗報告に加えて短い進捗を毎回全員にでももらうようにしています。卒業研究では、小



文化情報学部
准教授

ふかがわ だいじ
深川 大路 ゼミ

Daiji Fukagawa

さな失敗をたくさん経験してほしいと考えています。機械学習の仕組みと同じで、失敗を発見し解決することは学びに直結します。ハードルの低い報告会を頻繁におこなうことで互いの失敗を共有すれば、より多く学ぶことができます。卒業後も楽しく挑戦を続けてほしいと願っています。

ゼミ生の声(阿辺 裕真さん)

私は入学以前より計算機全般に漠然と関心を抱いていました。そのため、文化情報学部の中でも計算機に関し幅広いテーマを対象としている本研究室に興味を持ちました。

そんな私は現在「AIを用いた国語記述式問題の自動採点に関する研究」に取り組んでいます。自動採点とはその名の通り、計算機が答案に自動で点数を付与するものです。自動採点の普及は、教職員・生徒・経営陣など、多くの人々の利益を生み出すことにつながります。

自動採点に限らず、生活や社会に多大なる影響を与える計算機は、夢のような技術です。そんな技術を修めるべく、日々懇切丁寧な指導を受け、メキメキと力をつけ続けています。

「知的に野蛮」な 学生たちとともに



商学部
教授

たぐち さとし
田口 聡志 ゼミ

Satoshi Taguchi

田口研究室は、「知的に野蛮」をゼミのポリシーとして、行動経済学の手法を用いて「人間心理と世の中の仕組み」の関係を解きほぐし、未来のビジネスの処方箋作りを目指している。私自身、会計学を研究の軸足としながらも、世の中の「経済の仕組み」に広く関心を持ち、学際的な研究を続けていることから、学部・大学院ゼミでも会計だけにとらわれずに、人間心理に着目した領域横断的な研究を進めている。

ほとんどの学会がオンライン開催で残念ではあったが、最近はいブリッドで対面の学会も徐々に増え、学生とともに対面で学会に参加することの出来る喜びを感じている。

学生たちとともに、ひとつの研究をやり遂げることは本当に大変であるが、「知的な営み」に取り組んだ経験や「一生懸命何かに向き合い」苦労した経験は、学生たちにとって、卒業後10年、20年してから、きつとかげがえのないものになるだろう、と信じてゼミ教育を続けている。「大変だったけど、よかったな」そんなゼミ卒業生の声を楽しみにしつつ、研究や教育のあり方を模索する毎日である。

特に、研究室の第11世代からは、「学会発表をするゼミ」「ガチで研究をするゼミ」であることをメインに掲げ、学部・大学院生問わず様々な国内外の学会にて研究発表をおこなってきた。ここ数年は、新型コロナウイルス感染拡大の関係もあり、